映画　ベティ　ブルー

２５年前に公開された映画を今どき見て感心しているのもあまり感心できないことだけれど、当時と今とは特に性的な描写についての世の中の反応もずいぶんと変わっているだろうし、特に日本では開放の度合いが寛大になったことは間違いない。でも、今でもこのDVD（インテグラル版）は少なくともフランスでははは許されている１シーンがなお修正されているらしい。日本の文化的後進性が情けない。

冒頭から激しい全裸の若い男女のファックシーンが始まり、ひとし

きり続き、予備知識を持たない観客を打ちのめす。この映画はそういった興味で入っていっても充分に楽しめるものだ。きわめて美しく迫真的に撮られたこのシーンを含むこの映画の男女の露出シーンの多さが作品の世界的なヒットを呼んだことは確かだろう。けれど誰が見てもこれらのシーンは映画全体のバランスにかなっているし、凡百の俗悪な得ろ映画とは截然と一線を画した作品であることは疑いない。

男女の愛を真摯に描くためにラヴシーンは必須である。しかし、この映画のように見事に更に露骨に描いてその目的を十二分に達成した映画作家は稀なのではないだろうか。俳優の資質、技量も含めてきわめて難しいことなのだ。

男ゾルグ（ジャン・ユーグ・アングラード）はそれなりに主役級のいい男だし、相手役ベティの女優（ベアトリス・ダル）はこれ以上考えられないほどの適役。美しく愛らしくセクシーで自由奔放。ともかく冒頭のベッドシーンは私が見たラヴ・シーンの中では出色だった。

働いていた店のセクハラに嫌気が差してそこを出奔した１９のベティは配管工のゾルグに出遭って意気投合し毎夜抱き合い一緒に暮ら

すことになる。そんな自由で奔放な外観にもかかわらず、結構よく働き、ゾルグがひそかに書き溜めた小説に興味を示し、徹夜で読みふける一面もある。更に男に惹かれたベティは彼に不条理な仕事を押し付けた家主にあたり、借家に火をつけてしまう。

ベティはゾルグの書いた作品を傑作と疑わず、パリへ出てからもいくつもの出版社へ原稿を送りつけ、何度も送り返される。中でも傲慢だった編集者に腹を立てたベティは櫛で彼の顔を傷つける傷害事件を起こす。

彼女の情熱とそれに伴うヒステリックな行動は次第にバランスを欠いてきて、自身の妊娠の兆しが間違いだったと知った後特に激しくなって、幼児を誘拐しようとしたりあげくのはてに深刻な自傷事件を起こす…。

インテグラル版と銘打ったとおり、この映画は，８６年の公開時、もっと短かったらしい。私もこれを見た当初、物語の進行にもかかわらず時間の経たないのにちょっと不思議な感覚を持ったのだけれど、全体として冗長な印象はある。中古の高級車を買ったり、田舎の土地を買い与えたりという場面や、現金輸送屋襲撃の場面は不要なのかもしれない。

いずれにせよこの映画は徹頭徹尾ベティの魅力とその激しい愛、そして激しい偏執的な自己主張を追い続ける。

激しい情熱を持つ美女の骨董的な純愛と破滅を描いて間断ないこの作品は、どこかメリメのカルメンを思わせる。確かに悲劇ではあるが、ベティはカルメンほど倫理的に悪くはなく、徹底して愛する男ひとりにに純情を捧げ、ほとんど自分で滅びる。そこに私たちはベ

ティへの手放しの賛美が可能なのであり、この映画の美学があるのだろう。